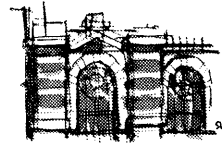


北欧保育短信(五)

飯田泰造



目の目を見ない、とり残された階層として扱われているかをひしひしと感じましたし、また精神的にも、「子どもの天国」などといわれる陰で、いかに子どもの本性が見失われているかを考えずにはいられませんでした。

そこで先ず、こちらの国のよいところをできるだけ紹介しようとしてきたわけです。だがもちろん、その中に問題がないわけではありませんでした。

北欧の保育のお便りを終わるにあたって、これまでは見たままをただ紹介したに過ぎないようでしたから、まとめとして、私の感じたことや意見を書いておきたいと思います。

とともに、日本の子どもを——現在多くの熱心な方々の努力にもかかわらず——とり残された階層としてとらえることが、いっそうはつきりしてきました。

これまで私の目は当然子どもに向けられてきました。けれども、老人や身体障害者などにも目を止めてみると、ほんとうに福祉国家の人たちをうらやましく思う

この国々の幼稚園・保育園をはじめ、子どもたちのための各種の施設の行き届いていること、身体障害者や老人に対する温い保護にくらべてわが国のそれは、物的にも国民総生産の強大化云々の陰に何と小さく

例えば、すでに成長の過程で起こっているいろいろな子どもたちの好ましくない問題についても、幼児—少年期をとおしての教育のあり方に反省もできてはいます。

また、よくスウェーデンの社会保障制度を批判する材料に、老人の自殺者の多いことをあげて、あまりの優遇のせいだと申します。(このことは、日本は青年のそれが多いことを比較対象にして考え直さねばな

らぬことですが) そのような社会状況の両面をふまえて、ここの子どもの教育を見とおした時、いろいろなことを考えさせられたのです。

先ず、私たちは、子どもをとり残された階層でなくする努力を怠ってはならないということでした。このことは、少しく、その基本的な考え方を伝えておかなければならないと思います。

即ち——

ヨーロッパ人の合理精神を人間関係にあてはめていく時、それは、個人主義をとります。スウェーデンにおいて、それが最も徹底しているように思えます。いいかえらば、一人一人の人間の尊厳を認めていくということですから、家族制度の中で見ても、親と子どもの関係が、この一線で貫かれている故に、親は幼い子どもの基本的生活習慣というようなものを除いては

全く干渉をさけています。その考え方は、*「親(おとな)のもっている既成の概念や時代観というものと、子どもが将来においてもつであろうものとは、当然異ったものであるはずだから、自分たちの思わくをあてはめてしまうことは、子どもの将来にある可能性を台なしにしてしまうに違いない。」*というものでしょう。

今でこそ、日本でも次第に、また、急速に、若い世代はこの要求を出してきつつあり、それがまだ定着していないので、家族制度の中のギャップから、さまざまのトラブルや中年層の親たちのどうしていいか解らぬとまどいやあせりがそこから出ているのも事実です。それが、ここでは、今にはじまったことでなく、長い間のくり返してすっかり定着し、明確に保持され、自然になつていくわけです。

そのような状況の中で、子どもは、誰に

もわずらわされずに思いや考えを拡大し、*「試行し、模索していきます。しかも自分の責任を感じつつ……。これは根本的にはまことに大切なことがらでありましようし、そこに自由ということがあり、主体的に自己を確立していくことができる場が、保証されるといえると思います。」*

このことは、私たちとしては、よくよくかみしめてみる必要を、今さらながら感じさせられました。

このような基本的関係のできている子どもたちを預かる幼児教育は、やはり家族の中でふんできた同一の軌跡をたどっています。それは当然のなりゆきであり、重要なことでしょう。特に造形活動のような創造性を推し進めていこうとする活動にとつては、大切なかまえでありますし、それをよく認識して、それを援護するてだとして環境を整備し、素材を用意する……それが

はスウェーデン流の富裕さや、その他の国で見た子どもたちへの愛情を背景にして、誠に多彩であるようにみられました。

ここでは、その努力を買い、アイデアをたくさん見せてもらって、参考になりました。

しかしながら、ただ環境設定が十分で、素材の配列が豊富であるだけで、果たしてそれ以上に創造的に更に一步を踏みだしていくだろうか、という疑問も生じてきたわけです。それは前述のようにあまりにも子どもをワクづけることへのコントロールから、少なくとも造形活動の場面で、それ以上のことを何もしていないか見たからであります。つまり後は子どもまかせでありました。ただフィンガーペインティングのぬりたくりであり、どろ粘土のいじくりであり、イーゼルに向かっておびただしい絵の具の浪費でありました。だが「そこに意

義がある」というのなら、それでよいと思います。各人のそこからでてくるものに期待するというかまえば誠に大切でありますから。

しかしその期待するものが、この幼児期においても内実しつづけていくものであったでしょうか。もちろん性急にその効果をおねらい、期待することは、大いなる誤りをおかすものであると知らねばなりません。それだからこそ、期待するものをより確実に期待できるようにしていかねばならないであろうし、漠然と「そうしておく」とよいらしい」というだけでなく、「そうにちがいない」という明確な自信がなければ、それは教育的かまえになってこないであります。そこに保育の弱さを見たのでした。では、それにはどうしたらよいか？というところに絵の指導のむずかしさもあり、特効薬とて見出せないものです。

そこで感じられたことは、いじくり、ぬりたくることももちろん大切なことながら、子どもの成長発達につれて、例えば、「試す」ことをしているその段階から、次にイメージを見出していく「想う」働きも自身も認められるような教師のとりあげ方やあげまじや見えない努力も必要でありましょう。

それが十分な環境を用意さえしてやれば必然的にそうになっていくというあり方では不十分であるとうけとれたのです。また、子どももそれに慣れてしまっているようでした。その考え方の奥には、やはり、私は「うっかりほめたりすることは、先生の概念のわくづけをするおそれがある」という制御意識が働いているように感じられたのです。

しかし日本のようすを思い起こしてみた

時、あまりにも対照的で、サービス満点、ほめたり、貼り出したり、助言をしてやったり、とてもにぎやかなありさまが浮んできました。そしてその心の中をのぞいてみると、やはり効果を期待している。しすぎているのではないでしょうか……。その教育効果(?)は現われ、子どもの絵は「巧く」なっていくとともに、内容がなくなりつまり全人格的な表現が影をひそめてしまふ……。どうもままならぬものだと思います。

この二者の間の整合が、一つの指導のメドのようにも思われました。

ある時、中学校の校庭で、休み時間に喫煙している何人かの生徒のそばを先生といっしょに通ったので、先生に「年少者の喫煙をどう考えるか？」とたずねますと、彼の返事は「これがスウェーディッシュデモ

クラシーだ」というものでした。そこで「明らかに害のあるものに対しても、それはよくないといつてやらないのか？」と反問しますと、「痛い目にあうのは自分でしょう。そして解るでしょう」というのです。

私には、これはどうも手おくれの感がしたものでした。もちろんこのことと絵などの指導とを結びつけようというのではありませんが、少なくとも子どものしたこと、よいものをよいといつてやるのが、愛情ではないかと思えますし、それをしないのは怠慢だと考えてもよいのではないのでしょうか。

私たちは怠慢でないために、なすべきことと、なすべからざることを明確に判別、把握する知恵と力を持ちたいものです。それは、学問が教えてくれるでしょうし、愛情もそれに加わらねばなりませんまい。

ここでも、それらのことが、積み重ねられて努力している施設には、やはり園全体に一致が見られたことでしたし、そのような園も見られたことは、大きな示唆を与えられました。それは創造的ふんい気といひなおすこともできると思います。

子どもの心性をそこねないように、そして全体的な子どもの幸せをもたらせる社会を打ちたてるために、保育者が多くの努力をしつづけなければならぬと思えます。それとともに、真の幸せをもたらすためには、一国だけの知恵や力だけでなく、いろいろな国、さまざまな考えを出しあい、励ましあつていくことは、今日、きわめて大切なことだと、深く感じさせられたことでした。

一九七〇年一月スウェーデンにて